

入試直前特訓ゼミ 第10回

βクラス
国語

問題をよく読み、できる問題から取り組むこと。
答えはすべて解答用紙に記入すること。

2026年 2月8日(日) 実施

受験 松井塾

1 次の各文の——を付けた漢字の読みがなを書け。

- (1) 仕事を迅速に処理する。
- (2) 言葉の裏に本心が透けてみえる。
- (3) 欠席者の有無を知らせる。
- (4) 感動で目頭が熱くなる。
- (5) 拙いが読む者の心を打つ文章だ。

2 次の各文の——を付けたかたかなの部分に当たる漢字を楷書で書け。

- (1) 新作映画のスピンオフを掲載する。
- (2) 回線ショウガイで電話が通じない。
- (3) 人形を器用にアヤツる。
- (4) 運動会用のテントをセツエイする。
- (5) 通勤ラッシュで電車がコみ合う。

を買いかねません」

「そんな莫迦な」

「莫迦だからするんです。どんな花でもいいからって、別れ際に胡蝶蘭を手渡されたら引きますよね」

それはそうだ。

「ですからお願いです。そんな真似だけはさせないで、ごくふつうであたりまえの花を売ってもらえませんか」

「わかった」

花屋としてできる範囲ではある。千尋を安心させるために、紀久子はにっこり微笑んだ。

(1) 「この店にある花をぜんぶ一本ずつください」

三日後の土曜、西が引越しをするはずの日の午後一時過ぎ、勢い込んで川原崎花店に入ってくるなり、宇田川はそう言った。

「どういふこと？」

床に落ちた花びらや葉を箒で集めていた紀久子は、その手を止めた。光代さんは休みで、芳賀は三階でランチを食べている。売り場にはあと季多しかおらず、彼女は作業台で、「花天使」経由で注文のブーケをつくっている最中だった。

「親に頼んで、昔の写真や動画を見て確認したんですけど、幼なじみに花を渡しているところなんかどこにもなくて、それなのに、いろんな花を買えば、そのうちのどれかは当たっているかもしれないと思って」

胡蝶蘭ではなかったにせよ、千尋の心配は的中したわけだ。

3 次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。(＊印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。)

紀久子は川原崎花店のアルバイトスタッフである。ある日、突然店に連日やってきて、買うでもなく店内の花を眺めている中学二年生の男子、宇田川に声をかけた。近所にある「戸部ボクシングジム」のTシャツを着た宇田川は、間もなく引越す幼なじみの女子に贈る花を探していると言い、紀久子は力になりたいと考える。宇田川は、彼女に欲しい花を尋ねていたが、「幼なじみのなにわからないのか」と返され、途方に暮れていた。

別の日、紀久子は花店の得意先の孫で、宇田川の同級生でもあるという千尋に町で呼び止められ、相談に乗ってほしいと頼まれた。宇田川が川原崎花店にいる姿を目撃した友達から、LINEに写真が送られてきたこと、宇田川と間もなく引越す幼なじみの西が面白いであること、西はどんな花でもうれしくせに、素直になれずにわざと宇田川を困らせていることなどを聞いた。さらに千尋の話は続く……。

「宇田川はいっぺん悩みますと、なかなか結論がだせずにハマをしでかすんですよ。切羽詰まると尚更です。ボクシングの試合でも、ここぞというときに大振りのパンチをだして、相手のパンチをまともに食らって負けちゃうヤツなんです。それが本人にすれば会心の一撃のつもりってところが、じつに間抜けで。今回もやりかねません。たとえばお店でいちばん高い花はなんですか」

「胡蝶蘭かな」

「西が好きな花が思いません、そもそもないのだから思いたしよがないんですが、だったら花屋でいちばん高い花を渡せば文句あるまいと胡蝶蘭

「ぜんぶ一本ずつにしたって、けっこうな値段になるわよ。それでもいいの？」

「かまいません。自分の全財産持つてきました」

「いくら？」

「四万七千六百円です」

あの子に花を売ったら、その同額の特別手当をだしてあげてもいいわ。

三日前、季多にそう言われたのを紀久子は思いたす。いや、駄目だ。ここは千尋との約束どおり、なんとかして、ごくふつうであたりまえの花を売るべきだろう。

でもどうやって？

「そんな花束をもらっても相手はよろこぶとは思えないけどな。花もかわいそうや」

ブーケをつくりながら季多が言った。注意はしているものの、その口調はのどかで優しくもあった。自分がいないときに、宇田川がきたらと思いつた三人には、千尋から聞いた話は伝えてあった。

「な、なんですか」

(2) 聞き返す宇田川は、動揺を隠し切れずにいる。

「きみ、戸部ボクシングジムの練習生よね」

「そ、そうですか」

「ボクシングだって、どれだけ乱打しても相手に効かなくちゃ意味がないでしょ。それよりも自分がこれだと決めた一撃を打つべきよね。つまりどの花がいいか、きみ自身が決めるべきじゃない？」

「だけどその花が西の欲しい花じゃなかったらどうするんです？」

(3) 幼なじみではなく西とはつきり名前を言った。だが宇田川本人は気づいてないらしい。

「相手が欲しいという気持ちよりも、きみがあげたいという気持ちのほうが勝ればいいの。そうすればもう相手もよるこぼすことができるわ」

(4) 宇田川は虚を衝かれた顔つきになる。そして店内を見回してから表に出て、店頭に並ぶ花の前に立つ。売れ行きが好調で、今日もヒマワリだらけだ。紀久子は彼のあとを追う。

「これをください」宇田川が指差したのは「マティスのひまわり」だった。「はじめて見たときから、彼女にぴったりな花だと思っていました」

「私もこのひまわり、好きです」紀久子はすくさま同意した。「いいと思います」

八重咲きのヒマワリでたくさんの花弁が重なり、たてがみに見える。他のと比べると色が濃いうえに大輪で、荒々しくも遅い、それでいて美しく眩しいヒマワリだった。

「ありがとうございます」

「何本にしますか？」

「三本っ」作業台のむこうから李多が言った。「ヒマワリだったら三本がちょうどいいわ。三本になさいな」

はたして「マティスのひまわり」を西がよるこんでくれたのか、そもそも宇田川はきちんと渡すことができたのか、花屋としては知る由もない。

だが数日後、花の配達でラヴィアンローズを走らせていたときだ。

「紀久子さああん」

んでいるのではないかと紀久子が助言していたため、手がかりを探そうとしていた。

マティスのひまわり——店の企画として、マティス・ゴッホ・

マネ・ゴーギャンの絵に描かれたものに似せて品種改良したひまわりを売っている。宇田川は前回立ち寄ったとき、これらの花に注意を向けていた。

これらの花に注意を向けていた。

ラヴィアンローズ——紀久子が配達で使う電気三輪自動車に、

李多が付けた愛称。

ユニフォーム——千尋はソフトボール部の選手。

寺山修司——(一九三五、一九八三) 歌人・劇作家。

交差点で信号待ちをしていると、千尋の呼ぶ声が聞こえてきた。斜向かいの歩道で、おなじユニフォームを着た子達十人ほどといっしょに信号待ちをしていた。

「先日ありがとうございます」

脱いだ帽子を振る千尋を見て、紀久子は寺山修司の短歌を思い出した。「列車にて遠く見ている向日葵は少年のふる帽子のごとし」

列車ではなく電気三輪自動車だし、少年ではなく少女だ。短歌の帽子は麦わら帽子で、野球帽ではあるまい。それにヒマワリが帽子を振る少年みたくに見えたというのと、まるで逆だった。

(5) 千尋が「向日葵」に見えた。

トルコギキョウやグラジオラスなどは、花の色で花言葉がちがうが、ヒマワリは本数でちがった。九百九十九本は何度生まれ変わってもきみを愛する、百八本は結婚しよう、九十九本は永遠の愛、十一本は最愛、七本はひそかな愛、一本だけだと一目惚れという具合にである。

そして三本は。

愛の告白だった。

(山本幸久「花屋さんが言うことには」ポプラ社 による)

[注] 光代・芳賀・李多——川原崎花店のスタッフ。李多は店長。

花天使——フラワーギフトを扱う会社。

昔の写真や動画——宇田川は過去に幼なじみのピアノ発表会で花束を渡したことがあり、彼女はその花を望

[問1] 三日後の土曜、西が引越しをするはずの日の午後一時過ぎ、勢い込んで川原崎花店に入ってくるなり、宇田川はそう言った。とあるが、この表現から読み取れる宇田川の様子として最も適切なのは、

次のうちではどれか。

ア 引越しの当日どの花にするかぎりぎりまで悩み、切羽詰まって決断したことを何ともあれ実行に移そうと気がはやっている様子。

イ 自分にとっての一大事であるため、引越しの当日までの花にするか考え抜いて決めたので自信を持ち、落ち着き払っている様子。

ウ ぎりぎりまで悩んだ結果にたどりついたアイデアを最大限に生かすために、できる限り多くの種類の花を得ようと欲張っている様子。

エ いいアイデアを思いついたはずだったが、いざ来てみると自分の全財産でも足りないかもしれないと気づき、急に不安になった様子。

[問2] 聞き返す宇田川は、動揺を隠し切れずにいる。とあるが、このときの宇田川の気持ちに最も近いのは、次のうちではどれか。

ア いきなり花屋のスタッフに客である自分が考え抜いたアイデアをけなされ、そんなひどいことを言われる筋合いはないと腹立たしい気持ち。

イ 自分のアイデアでは相手もよろこばないし、花もかわいそうだと告げられ、花屋のスタッフからの想定外の否定に対して驚き戸惑う気持ち。

ウ これ以上ない素晴らしいアイデアだと自信を持って買いに来たのであるが、相手も花もよろこばないはずはないとスタッフに反発する気持ち。

エ 花屋のスタッフのどこかで優しい口調で忠告され、自分のことを心から気にかけてくれていると感じて、ここは素直に従おうという気持ち。

[問3] 幼なじみではなく西とはつきり名前を言った。とあるが、この表

現から読み取れる宇田川の様子として最も適切なのは、次のうちではどれか。

- ア 店にある花を全種類買えば、必ず西の気に入る花があるはずだという思いにとらわれ、スタッフの言葉を跳ね返さねばと焦っている様子。
 - イ いま問題なのはどの花を西に贈るかということであり、ここでいきなりボクシングの話を持ち出すのは筋違いだと不満に思っている様子。
 - ウ 自分がどの花にするか決めるにしても、それを西が気に入ってくれるかどうか問題であり、西のことで頭がいっぱいになっている様子。
 - エ 自分の中ではすべての花を贈ることはすでに決まっているので、あとはそれを西が気に入るかどうかということだけしか眼中にない様子。
- [問4] 宇田川は虚を衝かれた顔つきになる。とあるが、「虚を衝かれた顔つき」になつたわけとして最も適切なのは、次のうちではどれか。
- ア 西が気に入るかどうかだけを考へて選択したが、スタッフの言葉を聞いて急に自信がなくなり、スタッフの言葉にすがりたくなつたから。
 - イ 相手をよろこばせるのは自分の気持ちだというスタッフの言葉は自分の頭になく、言われてみればその通りだと直感的に納得できたから。
 - ウ 自分があげたい花といきなり言われてもともと花に興味がなく、最初から素直にスタッフに助言を乞うべきだったと気づかされたから。
 - エ スタッフの言葉を聞き、今まで持っていた西がよろこぶことを第一に考へるといふ発想が、実は自分をよろこばす発想であると悟つたから。
- [問5] 千尋が〈向日葵〉に見えた。とあるが、この表現について述べたものとして最も適切なのは、次のうちではどれか。
- ア 千尋の尽力で贈り物のヒマワリが役立ったとわかり、それを短歌の中

4

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。

一般に「言葉とは何か」ということを考へてみると、二通りの理解が成り立つように思われる。(第一段)

第一に考へられるのは、言葉は、考へるための、あるいは考へたものを表現するための道具である、という理解である。つまり言葉は、あらかじめ存在している思考の内容——それは日本語とか英語といった具体的な言語、自然言語以前のものと言わざるをえないであろう——に形を与えるものであるという考へである。(第二段)

それに対して、第二に、思考は言葉を通してはじめて成立するのであり、言葉は思考の単なる道具ではない、という考へ方も成り立つ。(1)つまり、思想は言葉という形をえて、はじめて思想として成立するのであり、それ以前に純粋な思想というものがあるわけではない、という考へ方である。(第二段)

この二つの考へ方は、それぞれ次のような考へに結びついている。(第四段)

第一の見方は、私たちが日本語なり、英語なり、自分の言語(母語)を使う以前に、つまり、水とか、木とか、土とか、あるいはwaterとか、treeとか、soilといったことばを使う以前に、言いかえれば、ある事柄にそういう名前をつける以前に、もの、あるいは世界が客観的に区分(分節articulate)されていて、それぞれにいわば偶然的な仕方であらう、たとえば日本語であれば「水」という名前を、英語であれば「water」という名前をつけているのだ、という考へと結びついている。(2)ここでは言葉は、「一つの符牒」として、つまり道具とみなされている。(第五段)

の向日葵のイメージに重ね、千尋を表す花として象徴的に表現している。

- イ 短歌の少年の帽子と千尋の帽子を、ともに向日葵のイメージで捉え、千尋の振っている帽子を向日葵そのものとして幻想的に表現している。
- ウ 千尋が振っている帽子から、短歌の少年が振る、向日葵のような帽子のイメージを導き、二つの帽子を対比しながら感覚的に表現している。
- エ 短歌の少年のイメージを千尋に重ね、激しく帽子を振る明るく元気な様子、太陽に向かって咲く向日葵にたとえて印象的に表現している。

それに対して、第二の見方の方は、ものは言葉以前にあらかじめ分節されているのではなく、言葉とともに、はじめて分節される、つまり言葉によって世界の見え方、あるいは世界の現れ方が決まってくる、という考へと結びついている。(第六段)

具体的な例を挙げて説明することにした。たとえば「青い」ということばをとってみると、まず、それに対応するものが世界のなかに客観的に存在しており、日本語を使う人はそれを「青い」ということばで、英語を使う人は「blue」ということばで言い表しているというようにも考へられる。(第七段)

しかし厳密に見てみると、どうもそうではないことがわかってくる。日本語ではたとえば「草木が青々と茂っている」と言ったりするが、実際には緑色のことばである。「青信号」ということばもそうであるが、「青い」という日本語は、緑色系統の色をも指すことばとして使われてきた。黄色(yellow, gelb...)にせよ、赤(red, rot...)にせよ、それぞれの言語でそれが指す範囲は少しずつ異なっている。(第八段)

別の例を挙げれば、日本語では樹木と材木をともに「木」と表現するが、英語では樹木の方は「tree」材木の方は「wood」とドイツ語では樹木は「Baum」と材木は「Holz」ということばで表現される。そして、「wood」や「Holz」ということばは材木という意味だけでなく、森という意味をももっている。それに対して日本語の「木」や「材木」が森という意味でつかわれることはない。(第九段)

こうした例を手がかりに考へると、以上に挙げた二つの見方のうち、第二の見方の方が、言葉の本質をとらえていると言えるであろう。日本語な

ら日本語、英語なら英語、ドイツ語ならドイツ語というように、それぞれの言語において、いわば一つの連続体であるような知覚対象（自然）が、独自の仕方（区分）（分節）されているのである。つまり、それぞれの言語においてそれぞれの仕方、知覚対象に切れ目が入られ、そのそれぞれに独自の名前（青や赤、*grün*や*rot*）が付けられているのである。（第十段）

もしそのように、私たちの世界を見る見方そのものに言葉が本質的に関与しているとすれば、私たちは、言葉以前に遡るということはできないことになる。私たちは言語を通してしか世界を知ることができないのである。（第十一段）

もちろん言葉を習得する以前の小さい乳幼児の場合は別である。このような小さな子どもには、目や耳などの感覚器官によって生理的に分節された世界だけがある。しかし言語を習得するとともに、その生理的に分節された世界に私たちは言語によって分節された世界を重ねていく。そして、その言語によって分節された世界のなかで私たちは生き、思考し、他の人とコミュニケーションをしていく。それが決定的な意味をもつ世界で私たちは生きていくのである。（第十二段）

このように私たちの経験においては言葉が決定的な意味をもっている。しかしそうであるとしても、言葉、あるいは言葉で言い表したものがそのまま経験であるとは言えない。そこに問題があると言えるであらう。（第十三段）

先にも述べたように、私たちは私たちが抱く感情をたとえば「悲しい」とか「寂しい」とか言い表すが、感情はさまざま相をもち、また大きな

〔問1〕⁽¹⁾ つまり、思想は言葉という形をえて、はじめて思想として成立するのであり、それ以前に純粹な思想というものがあつたわけではない、という考え方である。とあるが、「思想は言葉という形をえて、はじめて思想として成立する」とはどういうことか。次のうちから最も適切なものを選び。

ア 思想は、客観的に区分されている世界の事象が、適切な言葉を与えられて正しい認識に至ることで成立するものであるということ。
イ 思想は、頭の中で漠然とした思考としてあつたものが、言葉によって明確な形をとることによって成立するものであるということ。
ウ 思想は、言葉によって分節され、表れてきた世界の様々な事象の認識が統合されることによって成立するものであるということ。
エ 思想は、一人の人間の中で形をとつていた考えが言葉として発信され、他者に伝わることによって成立するものであるということ。

〔問2〕⁽²⁾ ここでは言葉は、一つの符牒として、つまり道具とみなされている。とあるが、「言葉は、一つの符牒として、つまり道具とみなされている」とこの例として最も適切なものは、次のうちではどれか。
ア 日本語では樹木と材木をともに「木」と名付け、英語では樹木は“tree”、材木の方は“wood”と名付けていること。
イ 日本語では「草木が青々と茂っている」と言ったりするが、草木は実際に緑色であること。
ウ 「青い」という色は、世界中、客観的に存在していて、それを日本語では「青」、英語では“blue”と言い表すこと。
エ ドイツ語では、樹木を“Baum”、材木を“Holz”と表現し、森を表す

振幅を持ちながら、止むことなく動いていく。言葉はその一面を切り取って表現するのである。いかに詳細な描写を行っても私たちは私たちの具体的な経験を言い表すことはできない。言葉による表現と私たちの実際の経験とのあいだには大きな間隙が存在するのである。（第十四段）

この難問の前に私たちは置かれている。いかにすればそれを解くことができるであらうか。私たちの経験には言葉が深く関与しているという面と、言葉は私たちの経験そのものを言い表すことができないという、この二つの面を同時に考えることによってしか、私たちはこの難問に向きあうことはできないと言つてよいであらう。（第十五段）

言葉は私たちの生活のなかで大きな役割を果たしている。それだからこそ、同時に私たちはその限界にも目を向けなければならぬ。⁽³⁾ 私たちの経験のもつ豊かさこそが私たちの生の源泉であることに注目しなければならぬ。しかし他方、私たちは言葉を使ってこそその豊かさに形を与えることができるのである。大きく言えば、私たちは私たちが経験してきたものを言葉で言い表し、それを文化という形で蓄積してきた。その文化がたまたま豊かさのなかで私たちは生きていく。経験と言葉とは深く結びついており、切り離すことはできない。この結びつきに目を向けることで私たちははじめて、この経験と言葉という難しい問題を解くための手がかりを手にすることができるようであらうか。（第十六段）

（藤田正勝「日本哲学入門」による）

のにもHolzという言葉を使つた。

〔問3〕 この文章の構成における第十三段の役割を説明したものと最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア それまでに述べてきた言葉の本質を受けて、異なる視点から新たな仮説を立てることによって、論を見直している。
イ それまでに述べてきた言葉の本質を受けて、別の角度から問題をとらえ直すことで、論をよりわかりやすくしている。
ウ それまでに述べてきた言葉の本質を受けて、実際に運用される場合での妥当性に疑問を呈し、論を詳しく検証している。
エ それまでに述べてきた言葉の本質を受けて、新たな視点を提供することによって論を進展させる前提を示している。

〔問4〕⁽³⁾ 私たちの経験のもつ豊かさこそが私たちの生の源泉であることに注目しなければならぬ。とあるが、筆者がこのように述べたのはなぜか。次のうちから最も適切なものを選び。
ア 言葉には表すことができないひとりひとりの経験が、自らの豊かさを支えており、言語や文化に収まりきらないその豊かさに注目することが大切だと考えたから。
イ 文化はひとりひとりの経験が蓄積されることによって豊かさを増していくため、ひとりひとりが日本の文化を支えていることを肝に銘じて生かすべきだと考えたから。
ウ ひとりひとりの経験は言葉と深く結びついており、個人の経験がどれだけ言葉として表現され、文化として共有されるかによって、文化の豊

かさ決まると考えたから。

工 言葉はひとりひとりの経験そのものを言い表すことはできないが、言葉にできる範囲の経験をどれだけ積み重ねるかによって、個人の生の充実度が決まると考えたから。

〔問5〕 国語の授業でこの文章を読んだ後、「言葉によるコミュニケーションの難しさ」というテーマで自分の意見を発表することになった。このときにあなたが話す言葉を具体的な体験や見聞も含めて二百字以内で書け。なお、書き出しや改行の際の空欄、や。や。や。などもそれぞれ字数に数えよ。

5 次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。(＊印の付いている言葉には、本文のあとに「注」がある。)

『古今集』のある種の特徴をよく示していると思われる歌を二首ここに紹介してみよう。いずれも『古今集』の代表的歌人の、よく知られている歌です。

まず、『古今集』巻三、夏の巻の最後を飾る凡河内躬恒の歌で、これには題があります。「水無月のつごもりの日よめる」(旧暦六月三十日の日に詠んだ歌)。旧暦では、六月三十日が夏の最後の日でありました。この歌が夏の巻の最後に置かれているのもそのためで、『古今和歌集』に始まる勅撰和歌集の編集方針では、四季を詠んだ歌は厳密に暦の日付けの順に並べられるのです。

みな月のつごもりの日よめる

A 夏と秋と行きかふ空のかよひ路は

片方すずしき風や吹くらむ

躬恒

これは、暑くてたまらない夏が過ぎ去り、いよいよ待望の涼しい秋がやって来るといふ日の、楽しい空想を詠んだ歌です。歌の興味の中心は、季節が交替するまさにその瞬間、空中の夏と秋がすれ違う通路では、片一方にだけ、もう涼しい風が吹き始めているだろうと想像したところにあります。

言うまでもなく、夏と秋はこの日にいきなり交替するわけではありません

んし、空中に季節交替の通路があるわけでもありません。すべて、どちらかといえば幼稚な空想の産物であります。にもかかわらずこの歌があるチャーミングな感じを与えるのは、空中にまるで虹の橋のように空想的な通路がかかり、夏と秋とが互いに手を振り交わしながら、一方は立ち去り、一方は立ち現れるという運動のイメージが鮮やかに浮かぶからです。

(1) またこの歌は、当時の日本の教養ある人々が、暦という新しく現れた知識に対していだいていた強い関心をも示しています。暦に対する関心は、言いかえれば、時間の経過に対する関心です。平安朝の貴族たちは、生を考える時、たえず過ぎ去るものとして生をイメージする抜きがたい傾向を持っていました。盛者必衰、会者定離、栄枯盛衰こそ人生の常、とする思想は、仏教の教理から日本人が受け取った最も重要な人生観でありました。人間の生死についても、社会の中での個人の運命についても、恋愛の行方についても、日本人は確固として不変なるものよりは、片時も元の位置にはとどまらないものをイメージすることを好みました。それは一種のヘシミズムですが、同時にそれは、滅びゆくものの美の発見にも通じていました。一種独特のデカダンスを伴った、滅びゆくものへの愛着が、ここから生まれました。日本の美意識の重要な一要素であります。

しかし、このすでに広く知られている主題に深入りすることは、ここでは避けねばなりません。凡河内躬恒の歌は、その無邪気で大らかな空想において珍重すべきものでした。そこへ立ち戻って、小さな詩型の中を涼しい風が吹き抜けていく、その行方を追おうと思えます。

この歌が季節の最後に置かれていたことの意味は、次の巻四、秋の歌の部の巻頭に置かれた歌を読むとき、一層明らかになるのです。それは藤

原敏行の、立秋の日に詠んだと題のある次の歌です。

秋立つ日よめる

B 秋来ぬと目にはさやかに見えねども

風のおとにぞおどろかれぬる

敏行

この、日本人にとってはきわめて有名な、秋の到来を告げる和歌は、夏の終わりを告げていた凡河内躬恒の歌から、ちょうどリレー・ランナーが、前の走者からバトンを受け取るように、季節のバトンを受け取って、秋の第一走者として走り始めているのです。

つまり、夏の終わりの歌で吹いていた風は、この秋の始めの歌でも相変わらず吹いているのです。しかも、その風は、突然ふと気づくような微妙な音としてやって来た、秋の最初の一吹きなのです。まだ、目で見るものどこにも秋は来ていないのに、そっと起ち上がった秋の風は、その中にわずかな涼しさを含んでいるだけで、「あ、秋風が」と鋭敏な耳には聴きとめられるのです。

ここで重要なことが明らかになります。「視覚」よりもさらに微妙とてらえがたいのが普通であるはずの「聴覚」が、和歌では視覚よりも一層深い味わいをもった感覚として喜び迎えられているということです。

これは言いかえると、平安時代の歌人たちが、男も女も、いま眼の前で現実に見ているものよりも、むしろ音として遠方から聞こえてくるよそのものの「気配」に敏感だったことを示しています。そのことは彼らの生活

〔問2〕 Aの歌について述べたものとして最も適切なものは、次のうちではどれか。

A 暑くてたまらない不快な夏が終わり、涼しく快適な秋になったという季節の移り変わりの早さを、空の通路を吹く風に寄せて詠んでいる。

I 暦の上ではまだ夏であるが、空の通路では夏が変わって秋の風が吹いているに違いないという確信による秋の到来への期待感を詠んでいる。

ウ まだ夏の暑さが残るが、空の風の通路では秋の風が吹き間もなく涼しくなるという経験から、秋の季節の到来を論理的にとらえて詠んでいる。

エ まだ夏の暑さが残る中でも、空の風の通路では夏と秋の風がすれ違っているだろうという空想から、季節の変化を動的にとらえて詠んでいる。

〔問3〕 またこの歌は、当時の日本の教養ある人々が、暦という新しく現れた知識に対していざいた強い関心をも示しています。とあるが、「暦という新しく現れた知識に対していざいた強い関心」とは具体的にどのような点に表れているか。次のうちから最も適切なものを選びなす。

A 過ぎ去る夏と、秋の訪れという一つの時間の流れを、暦のとおり明確に分かれるものとして適用している点。

I 暦の上での夏の終わりを、過ぎ去り滅びゆくもののイメージでとらえて、そこに美しさを見出している点。

ウ 暦の上での夏の終わりの日に詠まれた、秋の風を空想する歌を、古今集の夏の巻の最後に置いている点。

エ 四季の移り変わりを暦によって決定し、暦の上だけで過ぎ去ってしまう夏への名残惜しさを歌っている点。

形態そのものと密接に関係する事実だったろうと私は思います。というのも、多くの場合、彼らの生活圏はきわめて狭く限られていたので、見て確かめることよりも、耳で聞くことによって生活が大きく左右されたからです。人の噂は、今とは比較にならないほど人々を動かす力がありました。特に男女関係では、耳で聞くことにたえず注意深くある必要がありました。視覚よりも一層聴覚に鋭敏である必要があり、それがおのずと今読んだ歌のような感覚をも生んでいるのです。

(大岡 信「日本の詩歌 その骨組みと素肌」による)

〔注〕 凡河内躬恒——平安時代前期の歌人・貴族。

ペシニズム——悲観主義。厭世主義。

デカダンス——フランス語で「退廃的」の意。文化・芸術上の用語としても用いる。

藤原敏行——平安時代初期の貴族。歌人。書家。

〔問1〕 Aの歌に用いられている表現技法として最も適切なものは、次のうちではどれか。

A 体言止め

I 比喩

ウ 掛詞

エ 倒置

〔問4〕 Aの歌とBの歌に共通する要素として最も適切なものは、次のうちではどれか。

A 夏から秋への移り変わりを、風が手を振ったりささやいたりする擬人法によって表現していること。

I 待ち望んでいた秋の到来の兆しを、秋の風という事象からイメージが結ばれる形で表現していること。

ウ 視覚によってとらえたまだ残っている夏と、聴覚によってとらえた秋の兆しを対照させて表現していること。

エ 耳に聞こえてくるかすかな風の音から、去ってゆく夏と、訪れてくる秋の気配とを確かな美感として表現していること。

〔問5〕 おのずとの意味として最も適切なものは、次のうちではどれか。

A 自然に

I はっきりと

ウ 何となく

エ きっかけで